

たがやす



昭和40年代の牛耕の様子（和歌山市西庄）

紀の川流域では、江戸時代以降、畿内の商業経済の発達を背景に、農地で栽培する作物から得る収益を高めるため、夏場の水田稲作とともに、冬場には田んぼを畠に替えて、裏作として麦や菜種などを栽培する「二毛作」が盛んに行われました。

農業が機械化する昭和40年代まで、田んぼや畠の耕作には牛が大活躍し、農家では牛を大事に飼育していました。田植え前には、牛に犁（カラスキ）を曳かせて田んぼで土を掘り起こし、馬鍬（カイガ）を使って土のかたまりを細かく砕いて、水田をならしました。

稲刈りが済み、畠作りの季節になると、田んぼを再び耕し、土を砕いて畠の畝を立て、畝土に筋を付けて種を蒔いたり、苗を植え付けたりしました。麦畠では冬場に中耕や除草も必要になるため、さまざまな器具を牛に曳かせて、効率よく畠を管理しました。また明治時代以降には、農作業の効率化を目的として近代化した農耕具が全国的に普及してだけでなく、当地域にあった新しいかたちの農耕具も生み出されます。

本展示では、紀の川流域で行われたひと昔の二毛作の様子を、耕す道具を通して振り返り、牛とともにあった農家の仕事や農業の工夫について紹介します。